

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0809 ◆◆◆

24/10/02

## 【 9月は「隠れ大変動」、大相場は10月も継続!? 】

先日終了した9月相場は、月間の変動幅が7.62円(139.58-147.20円)となった。引き続きなかなか大きな変動をたどっているわけだが、実は9月相場は見た目以上に大きな変動をたどっていたと言えそうだ。これは、ザックリ言って「147.20円 → 139.58円 → 146.49円」というV字型の変動、いわゆる「行って来い」に近い値動きをたどっていたからになる。いずれにしても、そんな荒っぽい展開が足もとの10月も続くのか、それとも徐々に落ち着いた値動きになっていくのか、以下では恒例になっている経験則の観点から考えてみたい。

### ◎「月間小動き」も少なくないが、「動く」ケースは大荒れも要注意

まずは当レターの恒例となっている過去の月間星取表を見てみると、1990年以降昨年まで過去34年間の戦績は20勝14敗となっている。勝率にして6割近くと、大きく極端に偏っているわけではないものの、「わずかにドル高有利」と言えるかもしれない。また、補足情報として2021年からの直近3年はすべて「ドル高」方向へと動いていた。

そんな10月相場に見られる別の特徴といえば、「まったく動かない」か「非常に激しい動きを示す」か、ふたつにひとつで両極端な値動きを示すことが少なくない——というものになる。実際、昨2023年の10月は月間変動4.42円で、これは年間最下位の最小変動。また2020年も月間変動2.08円、年間10位にとどまるなど「小動き」をたどるケースも決して少なくない。

しかし、より注意すべきは逆に「非常に激しい値動き」をたどったケースだ。典型的な事例は、大手ヘッジファンドLTCM破たん之余波を受け、変動相場制以降で一日当たり最大級の下げ幅(一日で約12円下落)を記録するなど、月間で25円以上も動いた1998年。さすがにこれは行き過ぎ、やり過ぎで稀なケースと思いきや10年後の2008年10月も月間変動幅15.67円を記録するなど、決して頻繁ではないものの、極めて特殊な事象とは言えそうにない。事実、今年7月にも月間変動幅は実に12.35円もの大変動を記録していただけに、ヒョッとすると「月間10円変動」の再来もありうるか。

周知のように、昨1日に自民党総裁選で勝利した石破茂氏が新総裁となり、早々に「10月27日投開票で衆院選」が実施されることとなった。石破政権は、為替や株式など金融市場の面から見た場合、いわゆる「ご祝儀」と呼ばれる動きがあまり観測されないなかの船出となり、一部からは「短命に終わる」などといった見方も取り沙汰されている。一方、米国についても11月上旬の大統領選に向け、現在までのところハリス氏、トランプ氏ともに支持が拮抗しているものの、直前ぐらいには大勢が薄っすらと予想できるものになっているのかもしれない。つまり、足もとの10月相場で過去に匹敵するような大相場、大波乱の展開が仮にあるとすれば、それは前述した日米の政治情勢を受けてではないかという気もしている。

最後に過去に起こった事象などをカレンダーから振り返っておくと、足もとの10月は金融機関などの破たんなどが目につく状況だ。一例を挙げると「独ハンブルグや米NYで金融恐慌(1907年)」、「山一証券の“とばし”発覚(93年)」、「京都共栄銀が解散発表(97年)」、「長銀国有化(98年)」、「千代田生命が更正特例法申請(00年)」、「大和生命破たん(08年)」——などとなる。幸運なことは、ここしばらくはあまり大きな企業破綻のニュースなどを聞かずに済んでいるものの、幾つか気になる話もあり油断は禁物か。もちろんこれは日本に限ったことではなく、米国や欧州あるいは中国、韓国などにおいても注意しておく要因ではないかという気がしている。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

